

## 地域医療をどう守りますか？

本市には3つの2次救急病院（山口労災病院、小野田赤十字病院、山陽小野田市民病院）があります。

これまで「地域医療について」は、“市民病院ニュース”で市民病院事業管理者のコラムを紹介してきましたが、他の2病院の実情はどうか、また、どのような思いや意見をお持ちなのでしょう。今回は、山口労災病院院長のコラムを紹介します。



### 医療を取り巻く諸問題：解決には市民のみなさんの協力が大切

山口労災病院院長 坂部武史

医師不足、医療崩壊、3分間診療、たらい回しなど、驚くような言葉が飛び交っています。医療従事者は患者のために一生懸命頑張っていますが、医療環境の改善には市民のみなさんの協力が大変重要です。

日本の医療費の割合（GDP比）は先進諸国の中で最低レベルです。加えて平成16年度から新医師臨床研修制度が導入され、医師、特に病院勤務医の不足が顕在化しました。医師不足は産科、小児科に限らず、ほとんどの領域で見られます。国はやっと大学医学部の入学定員を増やし、その中に地域枠を設けました。しかし、医学教育や修練期間を考えれば、医師が増えるのに10年はかかり、医師不足はそう簡単に解消しません。

通常、病院では限られたスタッフで患者を診るために予約診療を行っていますが、その間に予約外の患者や、救急患者にも対応しています。やむを得ず3分間診療に近いことや、救急患者を断ることが起きています。

では、どうすれば良いのでしょうか？患者の理解と協力が必要です。時間外や夜間の急患のうち、翌日受診で良いものが少なくありません。病院に行けばいつでも診てもらえるという感覚で受診されると、本当の救急患者に対応できなくなります。救急車をタクシー代わりに使う軽症患者も問題です。一晩中診療に携わった翌日も、多くの医師はそのまま続けて働くこともしばしばで、この状態が長く続けばやがて疲弊してしまいます。市民のみなさんが日頃から自分の健康に注意を払い、

“かかりつけ医”をもち相談することが大切です。“かかりつけ医”と2次救急病院（地域中核病院）の役割分担・連携で地域医療が成り立っているのです。これを守れば、医師不足は急には解消できなくても医療崩壊は防げると信じます。

よい医療システムの確立には医療従事者と患者との信頼関係が大切です。英語では患者はペイシエント（Patient）で、忍耐強い、辛抱強いなどの意味ももちます。これに対して病院はホスピタル（Hospital）で、古くは貧者、老人、病人などの収容・看護や貧しい子どものための慈善施設でもあったようです。現代の患者と医療従事者（病院）の関係をみると、多くの患者は本当にペイシエント（辛抱強い）と思います。しかし、中には少しでも気に入らないことがあると苦情を言い、ときには暴言・暴力をふるい、何かあれば医療訴訟に持ち込もうとすることもあります。医学は著しく進歩していますが、人間の身体の状態は一人ひとりで異なるため、医療行為は100%の成功を保証できるものではないのです。医療従事者側が一生懸命努力しての結果にもかかわらず、このようなトラブルに巻き込まれるのなら、無理をせず、危険を伴うかもしれない高度医療を避けようとする考えが潜在的に芽生え、縮小医療になりかねません。これでは医療の進歩は期待できません。

高度で安心できる医療システムを、医療従事者と市民のみなさんが一緒になって築いていきたいものです。